出会い（カイロス）の四十年に想う

――移りゆくものと変わらざるもの――

谷　隆一郎

はじめて宮本久雄さんと出会ってから、早や四十年以上になる。その間ずっと、敬愛するよき友、よき同行者として歩んできた。

もっとも、東大の大学院ではたまたま同期であったが、工学部卒業、何やら横すべりで人文科学系の大学院に入ったわたしにとって、はじめの頃宮本さんは先達であり、またとくにトマス・アクィナスでの先生でもあった。その後、長年にわたってそれぞれの時期に、いわばつかず離れずのまま、ほどよい距離を保ってさまざまな交流を重ねてきたのだ。そんな来し方を今、懐かしく感謝とともに想起する。同世代の知友で、亡くなったり大病を患ったりする人も多い中、二人ともまずまず健康で六十歳代を終えようとしていることは、やはり恵みと言うべきであろう。

そこで今回、求めに応じて宮本さんとの思い出の幾つかを綴ってみたい。学問的なことにはほとんど立ち入らず、たあいない交友記のようなものになろうから、人の参考になるようなものではないが、小さな思い出話として気楽に読んでいただければと思う。

宮本さんとは大学院に入った年の夏、信州の押田成人神父という方の庵で出会った。二、三の友人のほか、故五十嵐一さんも一緒であった。（その後華々しく活躍していた真中、彼が蒙った出来事を思うと、今も心が痛む。）そのときのことはよく覚えているが、宮本さんは包容力のある端正な人物という印象であった。ついでに言えば、およそ旧友というものは何十年経っても、身分や仕事などが何であっても、出会った頃の姿とほとんど変わらず、「お互い何か進歩したのかな」という感もある。宮本さんに関してはむろん、著作などいろいろ読むと共感と畏敬の念を禁じえないのだが、古くからの友人として見れば、それら公のかたちのうちなる人となりの方が、ある意味ではいっそう身近に感じられるのである。

ところで宮本さんのことは、出会う三年ほど前から耳に

していた。当時わたしは、本郷の西片町にある「同志会」という小ぢんまりとした学生寮にいた。（もちろん右翼ではなく、「キリスト者同志会」という明治時代から続く寮である。）そこで同郷（神戸）の友人、南光進一郎さん（精神医学の研究者）が、「駒場のカト研（カトリック研究会）には聖霊が吹いとった。……一人はスープしか飲まんが（腎臓の調子が悪かったのであろう）、言うことはすこぶる冴えとる」などと言っていた。そして（そのとき名前は聞いていなかったが）信州で宮本さんと会ったとき、「あのとき南光君が話していたのはこの人物に違いない」と直観したのである。

それからほどなくして、本郷近くに下宿していた頃、歩いて数分のところに宮本さんも下宿していることが分った。（当時わたしは――元来、キリスト教の古典に学びたいと思って理系から転向したのだが――、キルケゴール、ヤスパース、ハイデガーなどを読んでおり、教父・中世を正面から手がけるようになるのは、博士課程に進んでからだ。）そこで、トマス・アクィナスの『神学大全』をしばらく一緒に読んだ。宮本さんは「トマスの『真理論』を一夏かかって読んで、卒論を書いた」などと言っていた。そのときは「そんなものだろう」と聞き流していたが、後に自分もその書を繙くようになると、その著作の畏るべき密度からして、「とんでもないスピードだ」と思ったものである。

ただ、その頃のもっとも忘れがたい思い出は、実は別のところにある。夜更けまでトマスを読んだ後、宮本さんが「これから白山に映画を見に行こうか」と言うので、「よし行こう」ということになった。高倉健、藤純子主演の任侠映画だ。それ以後、そんな調子で何本も見たが、中でも印象深いのは『昇り竜』という映画である。女性の入れ墨師の「お京さん」が病で死んでゆく際、かつて男気に心打たれて彫った相手役の背中の入れ墨から「京」の文字をひそかに消してゆく。（二人は何ら愛の言葉を交わすこともなかった間柄だ。）

これだけでは「どうということもない」と思う人も多いかもしれないが、われわれにとっては（少なくともわたしには）、『昇り竜』の主人公たちの姿は、鮮烈な道行きに身を張って生きた往昔の修道者の姿が――一つの類比（アナロギア）としてあえて重ねればだが――こころに映じるのである。それはともあれ、われわれも妙なところで意気投合した記憶がある。もしかして、学問も然ることながら、

死にゆく一人の女性の感慨を何ほどか共有しえたことが、その後の信頼の素地ともなっているように思う。

あるとき、日の暮れた後であったか、本郷の図書館の前でふと宮本さんに出会った。薄暗がりの中、ふだんより晴れ晴れとした表情だ。聞けば、「ドミニコ会に入ることになった」という。以前からそんな気もしていたが、決断にはしばらく日を要したのであろう。それから彼は京都のトマス学院に移り住んで、修練期の生活に入る。わたしは実家が神戸にあったので、帰省の途中などでトマス学院によく立ち寄って、宮本さんの静かな沈潜の生活に触れた。何度かは故竹島幸一神父と三人で、京都の町を散策し、食事処で歓談もした。

その後、宮本さんはオッタワ、パリそしてエルサレムなどに留学したので、その間はたまに手紙をやり取りする位であった。その遊学の時期は六、七年に及ぶが、そうした雌伏期は、帰国してからの活躍の大きな素地・土台となっているのであろう。そう思えば、昨今は早く業績らしきものを作ろうとし過ぎる感もある。じっくり力をためて、然るべきときに世に出るというのも悪くない。（もっとも、宮本さんのような、若き日のゆっくりした道は、忙しい世相ではふつう取りにくいのも事実であるが。）

さて、その後わたしも一年だけだがイタリアに遊学する機会があり、シエナのドミニコ会修道院に居候させてもらった。「学問などはどこにいてもできる。どうせなら、シエナのカタリナのような聖人を育んだ風土に触れたい」という思いであった。

その年の夏、宮本さんがスペインからの帰りであったか、シエナにも数日訪ねてくれた。そこで、「聖母の町」シエナだけでなく、サン・ジミニアーノやアッシジなどにも赴いた。アッシジにはシエナから直通のバスが出ており、それを利用したが、車中で話に興じていると、「アッシジ！」という声が聞こえ、急いで飛び降りた。近くにあった教会などに入って、「まずまずだね」などと言っていたが、世界に名だたるアッシジの町にしては余り活気がない。が、そのとき、ふと気がついた。遥か向こうの山の方に、どことなく佇まいの美しい町が見えるではないか。われわれが降りたのは、いわば下界の国鉄アッシジ駅の方だったのである。そこで、「まあのんびり歩いていこう」と、しばら

く緩やかな昇り道をゆくと、アッシジのフランチェスコ教会のなかなか壮大な姿が見えてきた。

アッシジは言うまでもなく、年間数百万人もの人が観光に訪れる町だが、騒がしいというよりはむしろ、すべてを包み込むような静謐な姿を保持している。聖人を育んだ伝統の町とは、そういうものであろう。（シエナでも同様の感があった。）またアッシジの町から下ったところには、フランチェスコのいわば霊的な妹たるキアーラ（クララ）の小ぢんまりした修道院がある。中庭には沢山の小さな花で飾られ、その慎ましい人柄が偲ばれるかのようであった。それとは対照的に、郊外の険しい山腹に作られた隠遁所のような修道院がある。そこは、われわれが訪れた夏でも冷気が漂うところで、若きフランチェスコが身を体して修業した場所であった。

その夜われわれはアッシジの町に戻り、とあるレストランの庭先にしつらえられた席で夕食を摂った。そのとき飲んだワインは町の情感も手伝って、まさに逸品であり、いわば人生の旅に香気を添えるものとも思われたのである。

ところで宮本さんとは、彼が長い留学生活を終えて帰国後、一緒によく旅をした。学会などの集まりの後とか、彼が何かの用事で東京を離れたときなどに、どこかで落ち合って一、二泊するという位の旅である。たいていは田舎の山宿か一軒家の秘湯のようなところだ。わたしは余り所帯染みないので、一人身の宮本さんとしても誘い易かったのだろう。九州各地の温泉はもとより、松江や出雲、萩、あるいは吉野、熊野、城崎、そして信州等々、思えばかなりの数になる。（二人だけのことが多かったが、他の知友とともにということもあり、最近は若手の同行者、山本芳久さんを二度ほど誘ったこともある。）

そんな山宿での夜は、小むずかしい話になることもあるが、たいていは気楽な歓談というところだ。それぞれがしばらく学にいそしみ、忘れた頃に落ち合って日頃の疲れを癒すという感じであった。とくに宮本さんは、多方面で忙しくし、またかなり多作であるからか、わたしと宿でくつろぐときには、「僕はもう疲れたよ」とか言って、早めにふとんを被って寝入ってしまう。わたしが今よりは夜型であった際には、後に残されて一人黙然と想いに耽るということもあった。

そんな風に日本のあちこちを旅したことも懐かしい思い

出であるが、年月が経つと若いときのことも近年のことも、記憶の中では何やら渾然と交わり、全体が一つのかたちとなって、時折ふと現前してくるのである。

最近のこととしては、宮本さんの主催する「共生学」なるシンポジウムなどで、提題や特定質問を引き受けた。恐らくわたしが巷をよそに書斎にこもるだけではよくないと、引き立ててくれているのであろう。（というのも、わたしは生来やや社会意識が乏しく、人の大勢集まるところに自ら好んで出かけることは余りないからだ。）

ともあれ、宮本さんの哲学・神学の稀有な歩みも、このところ佳境に入ってきたようで、相当の勢いで次々と著作をものしている。いろいろ重複する叙述も多いようだが、それぞれに趣があり、いずれは大著作集となるだろう。そろそろ完成の域かと思ったら、「まだまだ、これからだよ」と言う。その絶えざる超出（エペクタシス）の原動力は恐らく、「あらわでありつつ隠されている存在」との、絶えず持続しその都度現前する出会い（『雅歌』に言う「愛の傷手」）であろうか。

さて、こうして数十年のときを振り返っていると、いろいろな師友のこと（年齢はさまざまであるが）、各々の学会や研究会のこと、あるいは『雅歌講話』の共訳のことなど、それぞれに懐かしい思い出が浮かんでくる。しかし紙数も尽きてきたので、ここではそれらについては措くとして、仮初の結びを記すことにしよう。

ナジアンゾスのグレゴリオスの小さな作品に、「高い〔神的〕ロゴスはあらゆる種類のかたち（形相）で遊ぶ。欲するままに、あれこれの世界を区別し完成しつつ」（『乙女への教え』）とある。そして、証聖者マクシモスは主著『難問集』の末尾で、右の言葉を註解し敷衍して次のように語っている。

「受肉の神秘」は使徒パウロによって「神の愚かさと弱さ」と呼ばれた。それはまた、神の溢れるほどの思慮のゆえに、「神の遊び」とも名づけられた。……われわれのこの生は束の間のものであり、地上での「神の遊び」である。……「その日は草のように、野の花のように」「瞬く間に咲き、瞬く間にしぼむ。」しかし神は、そうした姿を通して、われわれを「真に在るもの、決して移りゆかぬもの」へと導くのである。

……

古の師父たちのこれらの言葉は――わたしにしかと分っているとは言えないのだが――、哀しい定めのうちにも人間としての最上の希望を告げ知らせるものであろう。そして今回、宮本さんとの思い出を少しばかり書き記してゆくとき、この生におけるさまざまな出会いの意味と尊さを、改めて身に染みて感じさせられる。そこで最後に、日頃は面と向って口にすることはないが、旧友とのかけがえのない出会い（カイロス）を恵まれたことを思い、この場を借りて衷心から感謝の意を表したい。